

## 35 きよの住む部屋 3

星野博美

祖母がテレビを消してふとんに入るのは、いつも十一時頃だった。ブラウン管が発する様々な色の光はやみ、常夜灯のオレンジ色に染まった世界になる。木彫りの熊やこけしも、おやすみの時間だ。

線香の残り香が漂う部屋で過ごす夜は、長い。ふとんの中から、部屋にあるものをひたすら見続ける。祖父の遺影は謎だった。右から見ても、左のほうに寄って見ても、視線が合う。そんなことがあるだろうか。写

真のなかで祖父が生きている、などと信じるほど幼くはなかったが、なぜ写真の中の人と目が合うのかが不思議でしようがなかった。

遺影の祖父は、私の知っている祖父とは違っていた。祖父は実によく笑う、ふざけてばかりで祖母からたしなめられるような人だった。しかし遺影は、よそいきの、妙に怖い顔をしていた。それは、急に死が訪れたために遺族があたふたと集合写真を葬儀屋さんに加工してもらった類のものではなく、きちんとおめかしをして写真館で撮ったものだった。死ぬまでに、祖父には時間がたくさんあった。死期が迫っていることは知らなくとも、遺影に使われるかもしれないという予感はどこかにあったのかもしれない。だから余計に怖いのだった。

祖父の写真を見飽きると、天井に張られた板を見つめる作業に入る。

木目の数を数え、数が変化していないかどうかを確認するのは、眠る前の大切な日課だった。何かで聞いたことがあるのだ。夜になると、何かが昼間とは変わる。それは忙しい大人は気づかない微妙な変化で、たとえば階段や天井の木目の数だ。そこに、異界へ通じるドアが隠されている。気づいた子どもはそのドアから異界に連れ去られ、日が昇るまで戻れない。そして戻ってきた時には、見た目は同じだが、中身がまったく別の子どもになっている、と。

そのうち、夜中にいろんな音を聞くようになった。

ガチャガチャと玄関のドアを開けようとする音。廊下の扉が唐突にバタンと閉まる音。キシ、キシ、キシと板の間が踏みしめられる音。

そのたびにふとんから這い出し、確認しに行った。あとから祖母がつ

いてくる。鍵をかけたはずの玄関のドアが、少しだけ開いていたこともあった。

「おじいちゃん、来たね」

私がそう言うと、「そうだね」と祖母はきまって言うのだった。

「おじいちゃん、昨日来たよ」

学校へ行く前、食卓でそう言うと、二階の家族は凍りついた。

「鍵をかけたのに、玄関のドアが開いてたよ」

「気のせいだろ」

父はそう言つてそそくさと工場に立ち去り、母は「へんなこと言つてないで、早く食べなさい。遅れるよ」と言つて台拭きでテーブルを拭き始める。「ウソばかり！」と次姉は非難する。長姉だけは、肯定も否

定もせず、不安と同情がないまぜになった表情でこちらを見る。

一階では「来たね」「そうだね」で通じる話が、二階の家族には通じなかった。

いまの自分なら、こうツツコミを入れる。どこかのよっぱらいが家を間違え、うちのドアを開けようとしたのかもしれないし、夫を亡くして意気消沈した祖母が、玄関の鍵をかけたのかもしれない。おまけに祖母は庭に通じるガラス戸も閉め忘れ、突風が吹きこんだのだろう。暗い無音の世界にいと、人はいろんな妄想をするものだ。君の話がまるつきり作り話だと決めつけるつもりはないが、君は自分の見たいものを見、聞きたいものを聞いていたのだろう、と。

末っ子が、死んだばかりのおじいちゃんが夜な夜なやって来ると言う。二階の家族にとっては、朝っぱらから不気味な話でしかないが、祖母にとっては、祖父をこよなく慕ってやまない、孝行孫と映る。意図したわけではないが、ますます祖母の溺愛を勝ち取る結果になった。

確かに祖父には、死後も来てもらいたかったし、夜になると来ると、信じてもいた。しかし実は、それほど心温まる美しい話ではないのだ。私は幽霊を見たかった。しかしそれが知らない人だと、たまらなく怖い。

おじいちゃんなら、怖くない。そしておじいちゃんは幽霊になった。これはまたとない機会だ。

おじいちゃんは、きつと来る。物音。ほら。物音。やっぱり。物音。

だから言ったでしょ。物音。絶対いる。

物音がしたから「おじいちゃんが来た」と思ったのではない。祖父が来ることの証明のために、物音を必要とした、という感じなのだ。

ここで、死後の世界が存在するとか、靈感がどうのとかいう話をするつもりはない。これら一連の出来事を通じて学習したことはただ一つ、「おじいちゃんなら、怖くない」だった。

異様な怖がりで、階段すら一人で上り下りできなかつた子どもにとつては大きな収穫だった。幽霊の恐怖を克服した、と言ってもいい。死者は、自分がわるいことをしなければ、わるさはしない。しかもおじいちゃんの幽霊がうちにいれば、ほかの幽霊は遠慮して出て来られない。これからはおじいちゃんがうちを守ってくれる。

幼い自分に宗教という概念はなく、初めて出くわした得体の知れない「死」と折り合いをつけるため、自分なりの整合性をつける必要があった。そして編み出したのが、「おじいちゃんが来る」「ほかの幽霊を追い払う」「いてくれて安心」という三段論法だった。典型的な祖先崇拜の芽生えのように見えるが、それとは少し違う。誰かから誘導されたわけでもなく（むしろ親は即刻否定した）、祖母の部屋で誕生した、自分だけに通用する物語なのだった。

それは大いなる勘違いに基づいた稚拙な死生観かもしれないが、誰かからもし「それは一体全体、どんな宗教なのか」と責められたら、必死で抵抗するだろう。そのリアルな記憶だけは消せないのである。

私は最近、ある宗教における本流と異端との抗争や、異宗教への改宗



といった事柄に漠然とした関心を抱いている。仮に自分がいつか、ある特定の宗教、特に一神教、に心酔する日が来たとする。その際、大きな障害になるのは、このあたりの記憶かもしれないと思う。

そんなことを久しぶりに思い出したので、いつものように両親に話した。人生の一大転機を挙げるとしたら、祖母の部屋で暮らしたあの時期を挙げたい、と。すると二人は互いに顔を見合わせ、押し黙ったままだった。嫌な予感がした。顔に疑問符がたくさん浮かんでいる。

「おばあちゃんの部屋でいつとき暮らしたでしょ」

「何だ、それ？」

「おじいちゃんが亡くなった直後から」

「そうなの？」

なんと、二人ともきれいさっぱり忘れていた。しかも、話を聞くうちに思い出した、ではなく、記憶そのものをまるつきり抹消である。

「あの頃忙しかったからな、いちいちそんなの、覚えてない」と父。

うちの家族が過去を引きずらない性質なのはよく知っているが、これにはさすがに開いた口がふさがらなかった。父が、祖母に親孝行をしたくて立てた計画ではないか。一番小さい子どもを、死者どっぷりの世界にぶちこんでおいて、「忙しかった」だと？ 挙句の果てには「また話を作ってるんじゃないの？」ときた。

これは私の名誉に関わる問題なので、検証せずにはいられない。年子の姉に電話をかけた。仔猫のように一緒に育った姉だ、私の不在はさす

がに記憶しているだろう。

「そんなこと、あったっけ？」の一言。

「そう言われたらそんな気もするけど、あんたはとにかく話が大量だからね。あったとしても、ほんの一瞬だったんじゃないの？」

こういう家族と付き合い合っていると、本当に自分の記憶に自信がなくなる。すべては自分が作り上げた妄想なのではないか、と。

ちようど長姉が遊びに来る機会があったので、聞いてみた。

「もちろん覚えてるよ。ほかの人は忘れてたの？ ひどいね」

頼りになるのは、この姉だけだ。

「おばあちゃんにかわいがられてたもんね。羨ましくもあり、ちよつとかわいそうでもあった。なんか、うまく言えないけど」

そして姉から逆に質問された。どのくらい祖母の部屋で暮らしていたのかと。

実は、私にもその記憶は欠けているのだった。始まりは覚えているが、終わりを覚えていない。短かったような気もするし、長かったような気もする。何かひっかかるものがあつた。もし期間が短かつたなら、「祖母の部屋で死者の幻影と暮らした奇妙なひと夏」のような物語になりそうだ。終わりがフェイドアウトというのは、逆に常態化、つまり長期化を示唆しているような気がする。

しかし長姉以外の家族の記憶からは抹消され、自分も覚えていないとなると、終了時期の検証はほぼ不可能に見えた。

救いの手は、思わぬ方向から差し伸べられた。祖母が見ていたテレビだ。私が記憶しているのは、「ポーラ」「古谷一行と梶芽衣子」「浜美枝とレベッカ」という言葉のみ。それだけを頼りに調べてみた。

ポーラ化粧品本舗がスポンサーの「ポーラ名作劇場」は、一九六三年から一九七九年にかけて、毎週月曜日の夜一〇時から放送されていたドラマだった。

強烈な印象が残っているのは「浜美枝とレベッカ」だ。若い娘が裕福な実業家と結婚した。しかし家のそこかしこに亡くなった先妻の記憶が残って彼女を脅えさせ、次第に夫が先妻を殺したのではないかと疑い始める。実業家役は私の大好きな高橋幸治で、美しい先妻役が浜美枝だった。亡霊が家で生きているという設定は、自分と重なりあう部分が多か

ったため、夢中になった。何年かのちに古いハリウッド映画『レベッカ』を見た時、「ポーラの真似をしたのか!」と思ったほどだったが、もちろん『レベッカ』のほうが先である。

このドラマは「鏡の中の女」。一九七五年二月一〇日から三月二四日までの放送だった。

ん? ストーリーを理解したということは、このドラマを音声とともに見たということではないか。つまり、この時点で音声は解禁だったということか。

そして、「古谷一行と梶芽衣子」が出演したのは「幻のささやき」。一九七六年二月二日から四月五日までの放送。

こちらは物語を覚えていない。音声なしで見たため、ストーリーが理

解できなかったからだ。とにかく男女二人がいちゃいちゃするシーンが多く、「ふとんの中で何をやるのだろうか」と不思議に思った記憶がある。

つまり祖母がイヤホンをしたのは、単に男女関係を描いた番組だけだったのかもしれない。死者の幻影は、祖母としては刺激が少ないという判断だったのだろう。実際は、そちらのほうがよほど刺激は強かったのだが。

祖母の部屋で暮らし始めたのが一九七四年六月末だ。少なくとも、二年近く一階で暮らしていたことになる。

その想定外の長さに衝撃を受け、家族がそれをきれいさっぱり忘れていたことが、ひとときわこたえた。